

## ワークショップ 2 報告

栗飯原志宣・神吉宇一

ワークショップ 2 は「あなたの知らない世界～現地スタッフの本音」というテーマで行いました。日本とシンガポールをはじめ東南アジア各国で活動する企業関係者、日本語教育関係者、日本語学習者等が混在した総勢 57 名のみなさんに参加していただくことができました。

まず、情報提供セッションとして「大学におけるビジネス日本語教育の潮流」というテーマで、ビジネス日本語教育の現状と課題の概略をお話ししました。特に、ビジネス日本語教育とは何かという定義に関する問題提起を行いました。具体的には、現在のビジネス日本語教育の取り組みを、総合日本語との位置付け、学習のねらいと形態、CBI (Content Based Instruction) としての位置付けという三つの側面から類型化しました。その上で、大学におけるビジネス日本語教育とは、「グローバルなビジネス場面での活躍を通してよりよい社会やコミュニティの形成に積極的に関わることができる人材の育成」であるとし、そのためには、「今あるもの・コミュニティ等にあたたかい愛情を持ちつつ、批判的 (critical) な視点からよりよいものを模索する」ことが必要であること。そして、「マナーやスキルや『日本的なもの』に『はめる教育』ではないことを明確にしつつ、現在の CBI 的な取り組みから一步進めて CCBI (Critical Content Based Instruction) として位置づける必要があることを主張しました。

次に、ワークショップセッションでは、事例をきっかけとして各参加者がグローバルな職場環境での課題とその解決方法を考えることを課題としました。最初に、考えるきっかけとして、日本人と仕事をした経験を持つ外国人へのインタビューデータをもとに、仕事上のどのような点が自分にとってよいものであるのか、または違和感を持つのかを整理した事例を提示しました。その後、各グループで事例をもとにして自身が経験した類似の事例について列挙した上でディスカッションをしました。それから、他のグループのディスカッションをシェアする活動を行い、最後にいくつかのグループにディスカッション内容を発表してもらいました。グループディスカッションでは、グローバルな環境で日本語だけで仕事するという前提はありえないという意見や、日本語だけではなく複言語でやることによって双方が歩み寄ることができ、より理解が深まるという意見が出されました。また、人事評価に対する外国人社員のこだわりやそれを納得してもらうためのコミュニケーションの難しさなども挙げられました。これらのディスカッションを通じて、そもそもこういった事例は解決可能なのか、解決を目指すという課題設定自体が妥当なのかといった本質的な問いも浮かび上がりました。